

全員あえぎながら登る。まだ回りは真つ暗だ。こんな風にごつな所を我々が登っているなど誰が予想しよう。

胸までのラッセルを落させて少し下った所で杉澤が尾根より逆さになって転落。尾根より2m位の所にいるが、逆さになっているうえ、傾斜が強いので仲々思うように起きれない。

だが、雪が軟らかくフカフカしていたので、大事には至らなかった。この辺りは両側がスパッと切れたナイフリッジなので落ち方が悪いと下まで飛んでしまう。夏にフィックスザイルがある場所でザイルを出し、後藤トップで下降する。そして毛利、山口、杉山、杉澤の順で下る。全員ゼルプストがあるので、それにカラビナを掛けザイルに通す。それが最も安全な方法と思われたが、実際にはあまり良くなかった。トラバースなら良いが垂直方向ではブルージックを併用しないと効果はない。心配した通り、杉山がバランスを崩した時良く利かなかった。杉山が降りてきた時、彼のアイゼンが片方しかないのに気がついた。どこかで紛失した様だ。仕方がない。どうすることもできないのでそのま

ま行かせる。

再び全員でラッセルをしながら進む。トップ、セカンドは実に苦しい。独標の登りでは全員セイゼイしていた。この付近では両側がスパッと切れ風もあり実に気を使う。間ノ岳稜線のガスも切れ始め、北岳も姿を見せる。これで気持ちすがグッと楽になった。

ようやく最終コルに着き皆は写真を撮ったり8ミリを回したりけっこう忙しい。私は6×6の重たいプロニカを持ってきたが、結局、一枚の写真も撮れなかった。この尾根からの北岳はとにかく天下一品なのだが残念……。後は最終コルより稜線に向けてとにかく進む。あまりラッセルがきついで左に逃げて、岩稜ルートを狙うものの、上手にいかなかった。結局、元の通り沢をラッセルして上部を左にトラバースして岩稜の上に出る。そして事実上弘法小屋尾根を登りきった。

秋の荷上げ品回収に向かうが後藤、杉澤、山口とも記憶がハッキリせず回収に手間取る。杉澤、山口は随分見当違いの方向を指して「絶対ここだ」と主張する。彼等の所はいくら捜しても出てこない。私はもう一度下からゆっくり

捜す。初めここだと思った所がそうだった。ピッケルに「ガチッ」と一斗缶が当たった。毛利が例の調子で「お前ら少しだらしがないゾ」と怒鳴る。その通りだ。

荷上げ品を回収した。予定では今日はこの3千メートルの稜線で一夜を明かすのは大変貴重な体験になるからだ。だが、ポールが無い。計画変更し、全員一斗缶を背負って農鳥小屋に向かう。全員非常に疲れていた。足を引きずって歩く。風が冷たかった。杉澤が勝手に三峰岳に向かって下りだす。間ノ岳頂上付近は地形が複雑なのだ。ようやく農鳥小屋に着いたが予想通り閉じていた。後藤、毛利、杉山は近くにあった雪洞。杉澤、山口はテントに泊まる。雪洞は少し直してエスパースの内張りをしたのでとても暖かかった。16時の天気図は少し良い方向と判断した。

1月1日(風雪) マイナス20度
へタイム)起床1:20 出発(農鳥岳) 4:15 〃BC6:15 〃出発
7:25 〃間ノ岳9:35 〃稜線小屋
11:40(泊)

少し良い方向にいらっていると
思った天候は全く回復していな

かった。相変わらず外は猛烈な吹雪である。今日の予定は農鳥岳に登り北岳に向かい行ける所までである。毛利の意見で元旦なのでラーメンのタレの味付けで雑煮を食べる。大変うまかった。夕べの打合せで4時に農鳥に向かうべく3時55分に雪洞を出るが、杉澤のアイゼンバンドが不具合で15分遅れる。山口は足が痛むと休養。

小屋より少し登ると三峰岳方向よりもすこい風が吹く。白峰三山の中でもここは特に風が強い所だ。途中、悪い所を越えて短時間で西農鳥岳着。農鳥岳は中止して下山。まだ真つ暗の中、後藤がトップでいくが2、3回道を間違えた。テントにあまり早く帰ってきた私達を見て山口はビックリ。もう少し寝ていたかったとか。

風雪の吹きすさぶ中、テント撤収して間ノ岳に向かう。今日は、できればポーコンの頭まで行きたいが、この天候と、入山3日目であれがピークと考えられ稜線小屋泊まりになるかもしれない。しかし、もし稜線小屋が開いていなかったらどうするか。危険なことだ。間ノ岳まではそうきついで登りではないが、だから長らく風が強いのので閉口した。天候は依然とし